2014年11月19日　神奈川徐福研究会定例会資料

丹後（京都府）の徐福

神奈川徐福研究会会員　伊藤健二

一　徐福研究家の石倉さんを訪ねて　1
二　新崎神社　2
三　沓島と冠島　3
四　宇良神社（浦嶋神社）　3
五　羽衣伝説　4
六　まとめ　4

資料編

丹後地方地図　5
新井崎の徐福伝説（石倉昭重氏作成案内書の一部）　6
丹後徐福考（歴史研究　平成十七年八月号より）　7
新大明神口碑記　（原文と書き下し文）　9
信子節と新井崎神社　（石倉昭重氏の論文）　11
古代の音　陶塤（とうけん）が来た道　12
浦島神社の栞　13
『丹後半島歴史紀行　浦島太郎伝説探訪』（一部）　15

一　徐福研究家の石倉さんを訪ねて

神奈川徐福研究会有志は、丹後地方の徐福伝説の調査のため、八月二七日から三日間、京都府の丹後地方を訪れた。丹後半島は、日本三景の天橋立で有名だが、神話も豊富な場所で、徐福伝説だけでなく、浦島太郎伝説、羽衣伝説があり、さらに伊勢神宮の内宮、外宮が元あった場所とされる神社もある。これらの伝説が、徐福伝説と関連づけられるかどうかも興味がもてる。

私達はまず、地元の徐福研究家である伊根の石倉さんの自宅を訪ねた。石倉さんは、退職後、六二歳で徐福研究を始め、現在八八歳だそうだが、お元気に対応していただいた。丹後の徐福伝説は、江戸の安政時代に口伝をまとめた「新大明神口碑記」に漢文で書かれている。石倉さんはこの文章を石碑に刻み、自宅近くの徐福が祀られている新井崎神社に建立した。

石倉さん宅で

道路脇の徐福案内看板

伝説の内容は、この地にたどり着いた徐福が邑長（むらおさ）となり、里人をよく導いたので、死後、産土神（うぶすながみ＝土地の守護神）となった、というものだが、詳しくは6～8ページの石倉さんの文章を参照してください。また、「新神口碑記」の全文を9、10ページに掲載してあります。

石倉さんからは、我々へのプレゼントとして、土笛である陶塤（とうけん）の復元品をいただいた。陶塤は日本海側西日本のいくつかの弥生遺跡から発見されている、中国を紀元とする笛である。詳しくは12ページの資料を参照してください。

陶塤（とうけん）

霊符

また、「キュウ（口偏に急）急如律令」と書かれた。霊符をいただいた。この文は元々は政府の指令文の最後に付けるもので、「急ぎ律令の如くせよ、と言う意味だが、道教の呪文に取り入れ、やがて修験道でも使われるようになり、一切の願望が成就するとされる。また、この地方の名産で、石倉さんが自ら作ったひょうたんをいただいたが、ここにもこの字が書いてあった。

ひょうたん

二　新井崎神社

石倉さんの自宅から歩いて五分ほどのところの、海岸の絶壁の上に徐福を祀る「新井崎神社」があり、石倉さんに案内して頂いた。「新大明神口碑記」では、神社の祭神は童男女としている。ここの境内には、石倉さんによって建てられた「新大明神口碑記」の石碑もある。

また、神社のすぐ近くに、徐福が上陸したとされている「ハコ岩」があり、方士　徐福上陸之地」の碑が建っている。

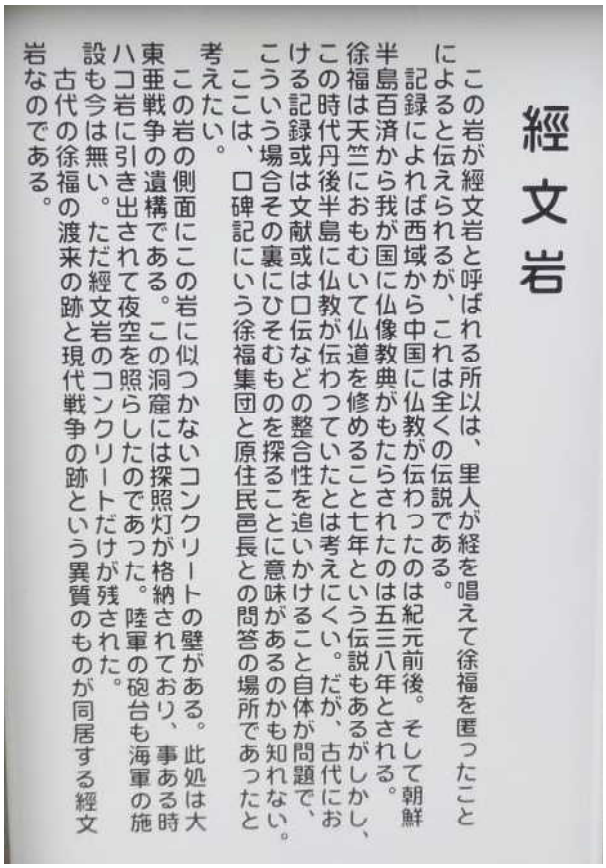
新井崎神社

「徐福上陸地」の碑

「新神口碑記」の石碑

また、近くには経を唱えて徐福を匿ったとされる「経文岩」がある。しかし案内板には、中国に仏教が伝わったのは徐福の時代後であり、全くの伝説であることが記されている。このような案内板は普通は「・・と言われている」などと、歴史との関係をぼかすのが、歴史ファンに混乱を招かないように配慮している。案内版に記されているように、歴史との整合性を見るのでは無く、伝説の裏にひそむ者を探るのが研究だろう。

経文岩



経文岩

この岩が経文岩と呼ばれる所以は、里人が経を唱えて徐福を匿ったことによると伝えられるが、これは全くの伝説である。

記録によれば西域から中国に仏教が伝わったのは紀元前後。そして朝鮮半島百済から我が国に仏像教典がもたらされたのは五三八年とされる。徐福は天竺におもむいて仏道を修めること七年という伝説もあるがしかし、この時代丹後半島に仏教が伝わっていたとは考えにくい。だが、古代における記録或は文献或は口伝などの整合性を追いかけること自体が問題で、こういう場合その裏にひそむものを探ることに意味があるのかも知れない。

ここは、口碑記にいう徐福集団と原住民邑長との問答の場所であったと考えたい。

この岩の側面にこの岩に似つかないコンクリートの壁がある。此処は大東亜戦争の遺構である。この洞窟には探照灯が格納されており、事ある時ハコ岩に引き出されて夜空を照らしたのであった。陸軍の砲台も海軍の施設も今は無い。ただ経文岩のコンクリートだけが残された。

古代の徐福の渡来の跡と現代戦争の跡という異質のものが同居する経文岩なのである。

現地の案内版

三　沓島と冠島

新井崎神社からは、遠く冠島と沓島が見える。島の名は神仙思想から来ているという。仙人は基本的に不老不死だが、自分の死後、沓と冠を残して死体を消滅させ仙人になる方法もある。これが直接徐福を表すものではないにしても、この地の神仙思想のムードが感じられる。

中央が「ハコ岩」　遠くの島は沓島と冠島

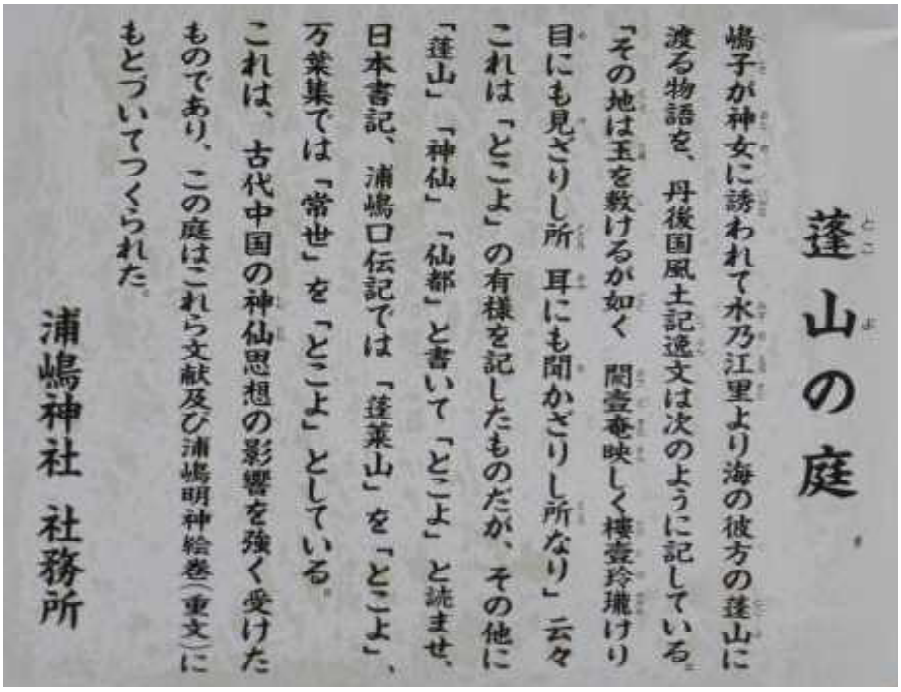
四　宇良神社（浦嶋神社）

新崎神社から車で十数分のところに浦島太郎を祀った宇良神社がある。ここの宮司の宮嶋さんは、池上正治先生の知り合いで、あらかじめ連絡していただき、直接宮司から話を聞くことができた。

私達の知っている、漁師が助けた亀に乗って竜宮城に行く話は、室町時代から江戸時代に成立したものだ。元の話は「丹後風土記」

宇良神社（浦島神社）

の逸文、日本書紀、万葉集などに見られ、名前も江戸時代風な「浦島太郎」ではなく、「浦島子」であり、貴族の日下部氏の先祖だそうだ。行った先も「竜宮城」ではなく、「蓬莱山」としている。この説明文は、浦島伝説が中国の神仙思想の影響を強く受けたものであることを語っている。なお、浦島神社が作成した「栞（しおり）」を13～14ページに複写した。



蓬山の庭

嶋子が神女に誘われて水乃江里より海の彼方の蓬山に渡る物語を、丹後国風土記逸文は次のように記している。

「その地は玉を敷けるが如く　閣壹奄映しく楼壹玲瓏けり目にも見ざりし所　耳にも聞かざりし所なり」云々

これは「どこよ」の有様を記したものだが、その他に「蓬山」「神仙」「仙都」と書いて「どこよ」と読ませ、日本書記、浦嶋口伝記では「蓬莱山」を「どこよ」、万葉集では「常世」を「どこよ」としている。

これは、古代中国の神仙思想の影響を強く受けたものであり、この庭はこれら文献及び浦嶋明神絵巻（重文）にもとづいてつくられた。

浦嶋神社　社務所

浦島神社の「蓬莱の庭」の説明文

五　羽衣伝説

丹後半島には、羽衣伝説が豊かな場所だ。丹後国風土記では、真名井と名付けられた泉に八人の天女が降り立ち、一人が羽衣を隠されてしまったため天に戻れず、万病に効く酒を造るなどしたが、最後には奈具社という神社に鎮座して豊宇賀能売命（とようかのめのみこと）となった。これが伊勢神宮外宮の豊受大神につながる。（そうではないとする意見もある）このほか多くの天女に関係する神社がある。詳しくは同行した津越氏の「丹後、元伊勢の神社巡り」を参照してください。

六　まとめ

これまで見てきたように、丹後地方には、神仙思想から来る伝説が豊富だ。また、ここの地形はリアス式海岸で、海岸に山が迫っている。そう言えば、私が見てきた徐福伝説がある新宮、熊野市波田須、男鹿、小泊のいずれも海があり、山が迫る、という雰囲気が似ている地形で、仙人が住む神仙にふさわしい環境だ。広い平野が広がる佐賀市も、徐福伝説の中心は金立山であり、富士山も神仙に影響を受けた修験道の聖地だ。河出書房新社の『丹後半島歴史紀行　浦島太郎伝説探訪』（瀧音能之・三船隆之著）では、丹後半島の伝説と神仙思想の関連を鋭く分析している。この本の一部を15ページから28に転写したので参考にしてください。今後さらに各地の徐福伝説を研究することにより、「徐福伝説とは何か」に迫れると思う。